

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p> <p>○緑肥作物利用技術 前年の夏にギニアグラスを栽培してすき込む。</p>	2 t/10 a
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥技術 局所施肥により肥効率を向上させ、施肥量を削減する。。</p> <p>○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 ・露地 13kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○機械除草技術 除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。</p> <p>○熱利用土壌消毒技術 太陽熱などの利用により土壌病害虫を駆除する。</p> <p>○光利用技術 黄色蛍光灯、光反射資材利用により害虫を忌避させる。</p> <p>○被覆栽培技術 雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：苗立枯病、根腐病、褐斑病等） 被覆資材により有害動植物の付着を防止する。 ・防虫ネット（アブラムシ類・ウナミジミ等）など</p> <p>○マルチ栽培技術 黒色マルチまたは着色マルチ、稲わら等利用により雑草を防除する。</p>	化学合成農薬成分回数 ・露地 7成分以内
<p>その他の留意事項</p> <p>有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。</p> <p>連作すると根茎腐敗病が多くなるので、できれば3年以上休耕する。</p> <p>収穫後の残さは適切に処分する。</p>		